

## 竹村元宏さんを偲ぶ

高橋伸治

人生の大先輩、竹村元宏さんが、令和2年4月22日にお亡くなりになりました。

この20数年に亘って、北本市の市民活動の中心にいらした方でした。北本市にとっては、「巨星墜つ」と言えるかもしれません。

以下、記憶を辿り、私との関わり、竹村さんの活躍を仄聞してきた限りを述べさせていただきます。

### ■初めての出会い

私が、竹村さんと初めてお会いしたのは、1999年(平成11年)3月でした。

当時、竹村さんは、北本市ごみ減量等推進市民会議の副会長の一人でした。私は、北本市まちづくり観光協会に参加し、インターネット委員会を担当していました。

その年の4月には、北本市で市長選挙・市議会議員選挙が行われました。

1987年(昭和62年)から12年間、市長の職にあった新井薫氏が勇退し、助役であった加藤高氏、市議会議員であった石津賢治氏、諏訪善一良氏、三宮幸雄氏の四人が立候補していました。

私は、同じ町内会から立候補した三宮さんの応援をすることになり、選挙事務所で主に書類づくりを担当していました。

その前の2回の市長選挙が無投票だったので、12年ぶりの市長選挙となり、市内のムードは盛り上がっていました。

そんな状況の中、3月の末だったと思いますが、竹村さんが三宮候補の選挙事務所を来訪されました。

四候補者の公開討論会を企画して、各候補者に参加を要請していま

した。

発起人は、竹村元宏・現王園孝昭・安江洋の三人でした。現王園氏は北本市子ども会連合会、安江氏は北本青年会議所で活動をしていた方でした。

勿論、それぞれ個人の立場での活動であり、組織名を出したのは、青年会議所と北本市職員組合だけだったと記憶しています。

市長選挙の結果は、かなり票が割れ、相対的多数票、全体の3分の1を獲得した加藤高氏が当選しました。

竹村さんの第一印象は、目の奥に強い意志力を持っている方というものでした。

#### ■まちづくり観光協会インターネット委員会

選挙戦が終わって、間を置かず、竹村さんが「北本を考える会」を立ち上げ、私も声をかけられました。

市政や市民活動に関する勉強会であり、来る者を拒まずの会でした。

衆議院議員に当選する前の大島あつし氏も参加していたことを覚えています。

そこで、繰り返し顔を合わせているうちに、私が担当していた北本市まちづくり観光協会のホームページ作成・更新を「手伝うよ」と言われて、ホームページの達人、藤井稔氏も誘って、インターネット委員会に参加してくれました。

当時、北本市が公式ホームページを開設する前で、北本市のイベント情報は、観光に関係ない分野も、まちづくり観光協会のホームページが発信していました。

藤井さんは、駅の自動改札や、鉄道運行システムを開発していた日本信号のシステム担当部長だった方で、前述したように、竹村さん曰く「ホームページの達人」でした。

他に、農業青年会議所のOBの峰尾信男さんたちも参加して、藤井さ

んの指導の下、ホームページを充実させていきました。

今思うと、当時の私は47歳、竹村さんは68歳、随分高齢なのに「すごいな」と感心していましたが、私は現在、当時の竹村さんと同じ年齢になっています。

#### ■北本市ごみ減量等推進市民会議

前述したように、竹村さんは、1995年（平成7年）に設立された北本市ごみ減量等推進市民会議の副会長をしていました。

私は、この市民会議には参加していませんでしたが、仄聞したのは以下のようなものです。

ごみ減量をテーマにした市民会議は、全国に例がない、極めてユニークな団体でした。

黒澤健一さんを中心とした地元の自治会連合会の関係者と市民公募による方々により組織されたものでした。

竹村さんも藤井さんも、市民向けの参加呼びかけに応募した方々です。

当時、退職して濡れ落ち葉にならないために、退職前から、地域貢献などを奨励する流れがありました。

結果として、様々な分野の専門知識を持った男性が多数参加し、この男性が多いこともユニークなことでした。

藤井さんが参加したことにより、ごみ減量に関する世界でも有数のホームページが開設され、海外からも視察を受ける組織でした。

竹村さんは、家庭ごみの含水率に注目し、北本だけでなく、全州市町村の家庭ごみの含水率を分析し、埼玉県に提供していました。

「退職後は、クルーザーに乗って楽しむつもりだったのに、ごみに乗ってしまった」

これは、雑誌記事になった竹村さん紹介の内容でした。

この市民会議には市議会議員で会った、金子真理子さん、高橋節子さんも参加していて、竹村さんの活用をサポートしていました。

## ■科学少年の誕生と大学での活躍

竹村さんからお聞きして、私が覚えている、竹村さんの少年時代のエピソードのいくつかをお話しします。

竹村さんは、1930年（昭和5年）12月13日に北海道の函館市で生まれ、育ったとお聞きしています。

小学校時代に、「竹村少年」が科学に目覚めた出来事があったそうです。

当時、竹村家では30羽ほどの牝鶏を飼っていたそうです。

おそらく、お父さんからでしょうが、どの鶏が、どのように卵を産むか、研究するように言われたのだと思われます。

そこで、竹村さんは、鶏に番号を付け、おそらく表側に鶏の番号、表頭にカレンダーを書いて、それぞれの鶏が卵を産んだ日を記録したそうです。

「それが面白いんだよ。1日置きに産むのも、2日続けて産んで1日休むのもいて、個性があるんだよ」

60年以上も前のことを、その時も、嬉しそうに話していました。

竹村さんの世代は、戦前に旧制中学校に入学し、途中で学制が変わり、新制高校を卒業した世代でした。

おそらく、1949年（昭和24年）か翌年に北海道大学に進学し、化学を専攻したと思います。

背景は曖昧ですが、通学のためのバスの料金問題があって、竹村さんが中心になって、学生によるバスの運行事業を行い、遂にバス会社が折れて、和解したということでした。

若い頃から行動力の塊だったのかも知れません。

## ■企業での武勇伝

竹村さんは、三菱商事グループの化学会社で仕事をしていました。

若い頃、左遷され、大阪で慣れない営業をさせられた経験があったそ

うです。

竹村さんはめげずに営業でも頑張り、大きな商談をまとめたようでした。

本社に復帰して、社運を賭けた製品開発のプロジェクトリーダーを任されたと聞きました。

記憶では、トレハロースという、食品や歯磨粉の充填剤となる糖質の量産プロジェクトだったようです。

「線形計画法を使ったんだけど、重要なのは、プロジェクトのメンバーにどう参加意識を持たせるかだったかな」

この竹村流の人心収攬術は、市民活動でも同じだったと思います。

社長は、資本を持っていた三菱商事から派遣されたそうですが、「会社のためにならない人は追い出した」と、ブラック竹村の顔も見せていました。

## ■SOHOクラブ北本

1999年（平成11年）の秋に、当時市議会議員だった石倉一美（かずよし）さんの発案で、「三鷹SOHOパイロットオフィス」を視察しました。

SOHOとはスモールオフィスホームオフィスの頭文字語で、通勤しないで自宅の近くの小さな事務所や自宅を事務所にして働くことを意味していました。

ロンドンとニューヨークには、若者たちのベンチャー企業や芸術家たちが集まっている「SOHO」という地名があり、これを意識した言葉でした。

アメリカでは、地名と区別するために、テレワークの「T」を加えて、「SOHOT」とも呼ばれていました。

前置きが長くなりましたが、この視察の結果として、北本市まちづくり観光協会インターネット委員会のメンバーが中心となって、「SOHOクラブ北本」が発足しました。

当時、まだソーシャルメディア（SNS）が普及していなかったため、Eメールの応用である「メーリングリスト」を活用した運営を行いました。

次の項目の「北本ネット」の効果もあり、このメーリングリストには、100名を超える参加がありました。

SOHOクラブ北本はオンラインの組織でしたが、実際に顔を合わせる「オフ会」を翌年の2000年（平成12年）からは、2ヶ月に1度くらいのペースで行い、竹村さんが、主に進行役でした。

#### ■ポータルサイト「北本ネット」

ごみ減量等推進市民会議とまちづくり観光協会のホームページは、前述したように、達人の藤井さんが大きな推進力でした。

そうした中、市内の会社や個人からのホームページのニーズを受けて、2000年の1月から、藤井さんが地域ポータルサイト「北本ネット」を開設しました。

全国のことにはわかりませんが、県内の市町村では最も早い開設として、新聞にも掲載されました。

ビジネスとしてのサイトに対しては、有料でしたが、市民活動団体などの財力のない団体には、それなりの課金となっていたと思います。インターネット元年と言われた1995年（平成7年）から4年経っていましたが、埼玉県インターネット市民利用率は20%前後、北本市が数%高い水準にありました。

利用率からみて、北本市は県内で先進地であったわけですが、私たちの活動との因果関係は、どちらが原因でどちらが結果であったかはわかりません。

前項のSOHOクラブ北本のメーリングリストメンバーが100名を超えたのは、市内の多くの皆さんが。この北本ネットを見に来ていたことによります。

その後、この北本ネットとSOHO活動は、密接に関係して進行しま

した。

### ■市民講師で運営された「IT講習会」

2001年（平成13年）の4月から、「IT講習会」が始まりました。これは、世界的なIT技術、つまり、情報技術の進歩により、電子メールを含むインターネット活用の基礎的な知識を、広く国民に獲得してもらうことを目的にした国の政策でした。

先ほどと同様に、全国のことにはわかりませんが、埼玉県63市町村の中で、IT講習会の講師を市民の中から組織化できたのは、川口市と戸田氏、そして北本市の3市だけだったと言われています。

他の市町村は、富士通やNECなどのパソコン教育機関に依頼せざるを得なかったわけです。

例外的に市民講師を組織化できた理由は、前述したように、北本市と関係を密にしている市民団体の方々、竹村さんや藤井さんたちがこの分野で活躍し、このことを、市の担当者が把握していたことが最大の要因と考えられます。

因みに、この事業のために、国は各市町村にパソコンを購入する補助金も供与しましたが、近隣の市町は20台前後のノートパソコンを購入したのに対し、北本市は100台を超えるパソコンを準備しました。私たちは、講習内容のレベルを一定水準以上にするために、自ら、講師用マニュアルを作成し、総勢30人の講師研修会を実施しました。その後、竹村さんは、IT講習会の内容を自学自習できるCD-ROMを作成し、無料で、多くの方々に配布しました。

### ■商工会SOHOサロン

IT講習会の準備の年度であった2000年夏のことでした。

当時の北本市産業振興課の佐々木秀樹さんが、市町村のユニークな産業系の事業に対する、国の補助事業があることを、私たちに教えてくれました。

佐々木さんは、三鷹SOHOパイロットオフィスの視察にも、市役所を休んで自腹で参加していました。

佐々木さんと私たちの考えは、SOHO的な働き方をしている人たちの「たまり場」を創設しようとするものでした。

詳しい説明は省略しますが、この補助金の性質としては、受け皿が、市本体や任意団体ではなく、北本市商工会だったのです。

そこで、佐々木さんが私たちと相談をして、補助金申請の企画提案書を作成しながら、北本市商工会が、趣旨を理解して、事業主体になってもらう必要がありました。

新しい考え方であったので、そう簡単には理解してもらえませんでした。

この時、キーマンとなったのは、商工会の副会長だった坂本槌巳さんと、商工会指導員だった榎本昌宏さんでした。

坂本さんは、北本駅西口駅前で、時計とメガネの店を経営していました。息子さんが私とホームページ作成の勉強を一緒にした縁があり、インターネットの今後の可能性について展望を持っていました。

商工会のトップに理解を得て、「SOHOサロン」事業は、2001年（平成13年）8月にオープンしました。

北本駅東口の斎藤傘店の2階、25坪ほどの施設でしたが、インターネットに接続された10台ほどのパソコンを、市民が無料で利用できるサービスを行いました。

竹村さんも含めて、十数人ほどが、「店番」として交代でこのSOHOサロンに詰めていました。

#### ■NPO法人「埼玉SOHO」

前述したように、「SOHOクラブ北本」はネットの中のメーリングリストを利用した任意団体でした。

一方、国の事業であるIT講習会や商工会SOHOサロンの運営の受け皿として、何らかの組織化が必要であると、私たちは考え始めて



いました。

株式会社や社団法人という選択肢もありましたが、より簡易に設立できる「NPO法人」にすることにしました。

まずは定款づくりでした。これには、私と、社会保険労務士の平田正昭さん、税理士の鈴木拓雄さんで原案を作成し、竹村さんもお意見をいただきました。

社会経験から言って、私としては、竹村さんに理事長をお願いしたのですが、「君の操り人形はイヤだよ。僕は副理事長としてサポートするから」ということで、私が理事長、竹村さん、藤井さん、鈴木さんが副理事長という体制でスタートしました。

NPO法制は、1995年（平成7年）1月の阪神淡路大震災の復興支援ボランティア活動の流れを受けて整備されたものでした。

2020年（令和2年）の段階では、埼玉県内4,000を超えるNPO法人があると思いますが、私たちの埼玉SOHOは、2001年10月に埼玉県から認証を受け、県内106番目、北本市では2番目の設立でした。

因みに、市内最初のNPO法人は、NGOでもあるアフガニスタンを医療面から支援していた「灯台」という団体です。

埼玉SOHOの目的は、SOHO事業者の支援とともに、市民のインターネットを中心としたIT分野の活動支援でした。

この目的に即して、私たちは多くの事業を行ってきました。

#### ■シニア情報生活アドバイザー事業

2003年（平成15年）から、埼玉SOHOでは、シニアのためのパソコン教室を開始しました。

その頃、SOHOの年長メンバーの一人、北村浩一さんが、シニア情報生活アドバイザー制度を発見してくれました。北村さんはNECのソフトウェア分野のOBで、SOHOにとっては大きな戦力です。この資格制度は、経済産業省のメロウソサイエティ構想の下、財団法

人ニューメディア開発協会が設立され、その事業の一つとして運営されてきました。

メロウソサイエティとは、シニアがゆったりとした生活をおくる環境をつくることを目的としています。そして、この資格制度は、シニアが、ネット社会に適応するための、仕事の分野ではない、インターネットの基本的な利用技術をサポートできる人たちを養成する事業です。

2004年(平成16年)の春に、SOHOの7人がまず、講習を受講し、資格を取得しました。私と、竹村さん、藤井さん、北村さん、木村武晴さん、内田紀夫さん、薄衣規矩夫さんの、言わば、7人の侍でした。

また、7人の資格取得と同時に、それまでの活動実績が評価され、シニア情報生活アソバイザー養成講座の開催主体としても認証されました。

この後、市内で20名以上、市外の方も含める50名以上の資格取得者を養成してきました。

因みに、木村さんは新聞社のOB、内田さんは警備セキュリティ会社のOB、薄衣さんは音響会社のOBと、多彩な経歴の皆さんです。ニューメディア開発協会と交渉にあったのは、竹村さん、北村さん、内田さんの3人でしたが、その後、市内でのシニアパソコン教室は、木村さんを加えて4人が中心になって進めました。

2020年4月現在、南小学校での週2回、市内3地区で週1回のシニアパソコン教室が継続されています。

他人ごとではありませんが、シニアの方は新しいことがなかなか覚えられない傾向がありますが、竹村さんは、辛抱強く、何回でも同じことを繰り返すことを厭わない方でした。

#### ■北本市自治基本条例

2007年(平成19年)、北本市は、北本市自治基本条例

制定に向けて、市民検討委員会を設置していました。

北本市には111の自治会があり、自治会連合会が組織されています。また、北本市特有の仕組みですが、111の自治会グループ化して、8地域コミュニティ委員会とその調整組織としてコミュニティ協議会が存在しています。

二重構造で、少しわかりにくいのですが、幾つかの自治会をグループにしたコミュニティは、合同体育祭や文化祭などを企画運営している組織と言えます。

この自治基本条例市民検討委員会は、自治会連合会関係者とコミュニティ関係者を中心として組織されていましたが、竹村さんは市民活動の面からの知識経験者として参加していました。

国のレベルでは法律、地方自治体では条例として、様々な分野の約束事が決められています。

法律のほとんどは、政府が国民や国内組織をコントロールするものですが、憲法だけは異質です。簡単に言えば、憲法は国民が政府をコントロールするものです。

地方自治体における自治基本条例も、同様であり、地方自治体の憲法とも称されます。

このことから、竹村さんはこの自治基本条例を大変重視していました。

私は、抽象的な理念条例よりは、市民参画条例、協働推進条例、市民活動支援条例などの具体的な条例の方が大切だと考えて、市民検討委員会から降りたのですが、竹村さんに叱られました。

兎角、このような条例は作ってしまうと、神棚に祭られて活用されないことが多いものです。

竹村さんは、このことが分っていたので、直後に「住民自治を守る市民の会」を組織し、市政のチェックを始めていました。

## ■北本駅西口ロータリー問題

2009年（平成21年）の春から、北本駅西口広場（ロータリー）の改修計画が動き出しました。

当時の石津賢治市長は、筑波大学の建築関係の専門家と「北本の顔西口駅前広場リニューアルプロジェクト」、通称「顔プロ」を進めていました。

当時の西口広場は、ある意味、ロータリーの基本原則から外れたユニークなものでした。

高崎線に対して直角に西口大通りがぶつかり、一辺50メートルほどの正方形がロータリーになっていました。

ユニークな点は、線路から20メートルほどしか離れていない、線路と平行した道路が、左右から進入していたこと、中の島があり、そこに植栽と20台分の駐車場があったことです。

つまり、人が歩く導線と車の導線が交差して、危険な箇所が4箇所もあったわけです。

しかし、中の島を囲む道路がかなり広く、3車線分は裕にありました。雨の日の送迎時には、かなり融通無碍に対応ができていました。

最初に提示された改修レイアウトは、中の島の植栽部分を大きく取り、線路に平行した道路からの進入をさせないものせした。

竹村さんは、改修前後のレイアウトの比較をして、走路部分の面積がどの程度減少しているかを調べました。

厚紙にして、両者の道路部分を切り抜き、北本高校の協力を得て、電子秤で小数点以下のグラム数値を求めました。

その結果、40%以上も減少することを証明しました。

このように、竹村さんは

極めて実証的な方法で、問題解決をする方でした。

豪華すぎる屋根と暗すぎる照明という問題は残りましたが、竹村さんの活躍によって、道路面積は15%ほどしか減少しないレイアウトに変更されて改修されました。

## ■新駅建設の是非を問う住民投票

2013年（平成25年）12月15日、北本市において「新駅建設の是非を問う住民投票」が行われました。

北本市として当然初の住民投票でしたが、全国でも駅の建設の是非を問う住民投票は、前例が2つあるかどうかというものでした。

そもそも、高崎線の桶川北本間に新駅を設ける計画は、1980年代からのものでした。

通勤圏の公共交通においては、概ね2.5kmごとに駅があるべきであると考えられていました。

桶川北本間は4.4kmであり、上記の原則に当てはまるものでした。桶川北本の市境には、首都圏の、最も大外に位置する環状高速道路「圏央道」が建設中でした。

この圏央道と高崎線との交差において、将来の新駅建設を前提として、300億円の追加投資を行い、アンダーパス（地下トンネル）となっていました。

北本市の南部の人々にとっては、新駅建設は長年の悲願だったわけです。

4団体の反対する市民グループが組織され、その1つの代表が竹村さんでした。

私もそうですが、竹村さんも、何が何でも反対という立場ではありませんでした。

当時の石津市長が駅を作る場合の条件として、72億円の総予算、市の負担が54億円というものを提示しました。

竹村さんは、市の負担がこれほど重たい計画に反対したのであって、民間開発との組み合わせであれば、賛成できるという立場でした。

事実、新幹線駅は別として、直近の新駅開発において、自治体が負担した額は20億円を下回るものでした。

住民投票の結果は賛成が8,000、反対が25,000となりました。

前述したように、反対の中には無条件に反対という人もいると思い

ますが、市の負担が少なければ賛成という人もかなり含まれていたはずで

ずです。  
フェアな竹村さんは、住民投票後に、「無条件反対ではない旨の声明」を。全戸に対して配布しました。

#### ■まとめにならないまとめとして

以上、取り留めもなく書いてしまいましたが、これらの他にも、断片的な思い出が沢山あります。

映像作品にもエネルギーを注いでいて、ビデオクラブの仲間も沢山いました。

本人のナレーションが入った「唐津くんち」祭り紹介の作品を、ビデオ仲間の方からいただいて、観たばかりです。

市民活動と市政への提言では、干支で一回り下で、同じ道産子だった工藤日出夫さん（理論派の市議会議員）と連携していたと思います。SOHOの仲間たちとは、数えきれないほどの飲み会やカラオケの会をもちました。

竹村さんは、低音の魅力で、女性群から絶大の人気を博していました。因みに、カラオケで最後に皆で歌う曲は、「地上の星」か「いい日旅立ち」でした。

空の星になって、旅立っていった竹村さんのご冥福をお祈りします。